

## コロナ禍の中、更生の道を歩き始めたある女性の話

初、ラーメン屋で見せたおぼつかない箸使いは、多々羅たちと過ごす中でしっくり持てるようになり、うつむき、暗かった表情は、徐々に明るくなっていった。希望に満ちた瞳。カラオケ屋で見せる笑顔。職場の老人ホームで、一生懸命、老人の世話をする姿。彼女のすべてが愛おしい。

だがそこに、コロナという魔物が入り込んだ。せっかく繋がった社会との糸が、1本ずつ断ち切られていく。

### 自分の幸せを痛感

もしあの時こうだったら、もしこの人にもっと早く出会っていたら……。しょせんは“たられば”の世界だ。でも、この“たられば”で救われる人は大勢いる。杏に救われた人もたくさんいた。老人ホームの老人もそうだし、後半に出てくるシングルマザーもそうだ。それを阻むのが、往々にして社会だったり制度だったりする。

「保健所の要請」「政府が決めたこと」。せっかく見つけた居場所から締め出された人たちは、どこに救いを求めれば良いのか。「自己責任だ」「世の中は不条理だ」というのは簡単だ。だけどそうした言葉で片づけられない人、必死にやっても滑り落ちてしまう人がいる。自分だっていつ何時そうなるか

分からない。

社会的弱者という言葉が聞かれるようになって久しいが、その弱者にとって必要なことは何なのだろう。社会的セーフティーネットというものはあるが、果たしてそれは、必要とする人に行き渡っているのだろうか。普段はひとごとと思っていたことが、この映画を見たことで、にわかに関心したこととして捉えられ、同時に、自分がこうして普通の生活を送れていることが、どれほど幸せなことかと痛感する。

杏を演じるのは、話題になったテレビドラマ「不適切にもほどがある！」で、主人公の娘・小川純子を演じた河合優実。22年公開の映画「PLAN 75」でのコールセンターの職員役も印象に残ったが、その時とも純子ともまるで違う表情に魅了された。「この役と、主人公のモデルになった女性を自分が守る。絶対に守らなきゃと、まず心に決め」、役に臨んだそうだが、杏という女性が確かな存在として実感できたのは、彼女がそうした覚悟を持って演じたからだろう。

初めて警察に捕まった杏（左）は、刑事の多々羅（右）の取調べを受ける

